

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：34521

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13111

研究課題名（和文）母子の身体接触場面で子どもが母親へ及ぼす影響と有効な行動レパートリーの実証的検討

研究課題名（英文）An empirical study of the effects of mother-infant body contact on mothers and effective behavioral repertoires

研究代表者

西中 華子（Nishinaka, Hanako）

姫路獨協大学・人間社会学群・講師

研究者番号：60801595

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では乳児のアタッチメントの形成に、母子の身体接触におけるどのような行動レパートリーが有効なのかについて検討を行うこと、またそれらの身体接触の行動レパートリーの生起頻度に、母親の心性や母子関係がどのように関連するのかについて検討を行った。その結果、母親の見捨てられ不安が高いほど生起頻度が増す「愛情的タッチ」について、乳児期という固有の時期において、遊び場面という限定的な環境では、子どものアタッチメント形成に肯定的な影響を及ぼすが、泣き場面では寄与しないことが明らかとなった。同様に母親の見捨てられ不安と関連する「遊びのタッチ」は、アタッチメント形成に否定的な影響を及ぼす可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

母子の身体接触は「タッチケア」や「ベビーマッサージ」などの用語で世間的に認知され、母親たちの関心は高い。本研究の結果より「ベビーマッサージ」や「タッチケア」と関連すると考えられる「遊びのタッチ」のアタッチメント形成への影響が示された。「遊びのタッチ」のアタッチメント形成への否定的影響は、タッチを行うことそのものの影響なのか、それを強迫的に追及してしまう母親の心性にあるのかなどについては、今後の検証が必要であるが、一定の示唆を得たと言える。加えて子どものアタッチメント形成に肯定的な影響を与える身体接触のレパートリーについても明らかになったことから、育児支援の新たな可能性への知見を得たと言える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined what kind of behavioral repertoire in physical contact between mother and child is effective for infant attachment formation. As a result, regarding "affectionate touch", which has a higher priority as the mother's anxiety about being abandoned increases, in the unique period of infancy, in the limited environment of play, there is a positive way of thinking about children's attachment formation. It became clear that does not affect attachment formation in the crying scene. Similarly, it was suggested that "playful touch", which is related to mothers' fear of being abandoned, may have a negative effect on attachment formation.

研究分野：発達心理学

キーワード：母子相互作用 身体接触 アタッチメント タッチケア ベビーマッサージ

1. 研究開始当初の背景

Bowlby に始まるアタッチメント理論では、乳児のネガティブな情動表出に際し、母親が乳児の内的な状態に共感しフィードバックを行う調律的応答 (Gallese, Eagle, & Migone, 2007) を重視する立場が台頭しつつある。例えば、蒲谷 (2013) はこの調律的応答について、乳児のネガティブな情動表出への言語的、表情的応答として具体的行動スキル(「笑顔」という表情を浮かべながら、乳児の情動状態を言語化する「心境言及」を行う)を提案している。このように乳児のネガティブな情動表出に直面すると、ほとんどの母親が行う抱き上げるなどの身体接触は、小児科学や保育学では実践的重要性が指摘されてきている。世間一般において、「タッチケア」や「ベビーマッサージ」などの用語で認知され、母親たちの関心は高いと言える。しかしながら、母子の身体接触における接触面の広さ、抱きしめ方の強さ、さすり行動の有無など具体的にはどのような身体接触が有効なのか、その際のアイコンタクトや話しかけなどの付帯行動も必要なのかなどについての実証的な検討は多くない。また、こうした身体接触についてアタッチメント形成の観点からは「母親から子どもへの影響」の重要性が指摘されているが、どのような特質をもつ母親がどのような身体接触を行う傾向があるのか、またそれらの身体接触が子のアタッチメントに及ぼす影響についての検討は必ずしも多くない。加えて、母子相互作用における前言語期の「子どもから母親への影響」についても、同様に十分検討されているとは言えない。以上より、母子相互作用によるアタッチメント形成において、母子の身体接触の重要性と、身体接触の具体的行動レパートリーにおいて、具体的にどのようなものが有効であることを明らかにすることが必要であると考えられる。さらに、身体接触時の母子相互作用に注目し、そうでない時のそれとの機能的、心理的相違、とりわけ「明示されたメッセージがない子から親への影響」を明らかにし、子の持つ親制御性とその影響を検討することも課題であると考えられる。

そこで、本研究では乳児の安定的なアタッチメントの形成に、母子の身体接触におけるどのような行動レパートリーが有効なのかについて検討を行う。またそれらの身体接触の行動レパートリーの生起頻度に、母親の母性や心理的適応、母子の関係性がどのように関連するののかについても検討を行う。さらに以上の検証を通し、子のもつ親制御性についても考察を行い、新たな育児支援への視点を模索する。

2. 研究の目的

以上のような背景から本研究では、(1) 母親の内的作業モデルのパターンが、母親が行う身体接触とどのように関連しているのかについて、(2) 母親の子への心理的な密着レベルが、身体接触のレパートリーにどのように関連し、さらに子のアタッチメント形成に影響を及ぼすのかについて検討を行うことを目的とする。加えて上記(1)(2)において、子の月齢や年齢といった発達段階による差異についても検討を行う。

3. 研究の方法

上記(1)においては、母親と子どもの身体接触場面について観察を行い、母子の身体接触レパートリーを評定、類型化した上で、統計的分析を行った。(2)においては質問紙調査を行い、統計的分析を行った。詳細は次項を参照。

4. 研究成果

(1) 母親の内的作業モデルと身体接触パターンの関連

2019年3月～5月に、知人を介して調査協力者を募った。近畿圏内の4～10ヶ月の乳児及びその母親28名(有効回答数26名)から調査協力を得た。

調査内容については以下の通りである。1) 観察：身体接触を行いながらおもちゃを交えたやりとり場面(以下、やりとり場面)(5分)、母子分離場面(3分)、再度の身体接触を交えたやりとり場面(以下、再会場面)(5分)の計13分間の観察を行った。母子分離場面では観察者がおもちゃを回収し、母親には部屋から退出してもらった。観察時は2台のデジタルカメラを使用し、母子双方の表情変化及び身体接触の様子を中心に撮影を行った。2) 質問紙調査：フェイスシート(母子の年齢・月齢、母親の職業、子の出生順位、出生時の異常、出生時体重) 母親の内的作業モデルのパターン：ECR-GO(中尾・加藤, 2004)(30項目, 7件法)。3) 身体接触の評定：タッチ評定尺度(麻生・岩立, 2016)(遊び場面19項目, 3件法, 泣き場面19項目, 3件法)を用いて、観察された母子の身体接触場面について評定を行った。

やりとり場面、再会場面それぞれにおける、母子の身体接触について評定を行った。なお再会場面については、乳児がネガティブな情動表出を行ったケースのみを評定対象とした(以下、泣き場面)。フェイスシートで尋ねた内容のそれぞれを独立変数、身体接触の評定結果を従属変数とする。一要因分散分析を行った。その結果、子の月齢が5か月以下の場合、8か月以上の場合と比べ、通常場面において、「キスする」、「なでる」、「さする」といった「愛情的タッチ」の頻度が有意に高いことが示された($F(6,19) = 3.86, p < .05$)。月齢の低い乳児においては高い月齢の乳児と比べ、子どもの自律的反応がそれほど多くないため、「キスする」、「なでる」といった

一方向的な「愛情的タッチ」の頻度が多くなるのではないかと考えられた。

次に母親の内的作業モデル得点の平均値と身体接触パターン得点の平均値の相関係数を算出した (Table1)。その結果、母親の「見捨てられ不安」と、通常場面における「愛情的タッチ (通常場面)」との間に有意な中程度の正の相関が、「愛情的タッチ (泣き場面)」、「遊びのタッチ」の間には中程度の有意傾向の相関が示された。加えて母親の「不安」と、通常場面における、「マッサージする」、「くすぐる」、「つつく」といった「遊びのタッチ」、及び泣き場面における「愛情的タッチ」との間に有意傾向の中程度の正の相関がみられた。さらに母親の内的作業モデルのパターンを、浜井・利根川・小野田・上淵 (2011) に倣い、「見捨てられ不安」と「回避」を軸として4群 (とらわれ、安定、対人恐怖回避、拒絶回避) に群分けを行った (Figure1)。その上で内的作業モデルのパターンを独立変数、身体接触のパターンを従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果、「とらわれ群」の母親は泣き場面における「愛情的タッチ」を、「安定群」の母親より高い頻度で行うことが示唆された ($F(3,9) = 3.00, p < .10$)。以上より、母親の不安傾向が高い場合、母親自身の不安を補完する目的で「キスする」などの「愛情的タッチ」や「マッサージする」などの「遊びのタッチ」が頻繁に行われるのではないかと推定された。また乳児の泣き場面では、不安傾向の強いとらわれ型の母親はとりわけ強く不安が喚起され、その結果自身の不安を軽減する目的で「愛情的タッチ」を頻繁に行うのではないかと考えられる。

Table1 母親の愛着と身体接触パターンの相関

	母親の内的作業モデル	
	不安	回避
<身体接触のパターン>		
安定的タッチ	.021	.009
愛情的タッチ (通常場面)	.412 *	.258
遊びのタッチ	.336 †	.218
なだめのタッチ	-.057	.384
愛情的タッチ (泣き場面)	.489 †	-.354
侵入的タッチ	-.432	.063

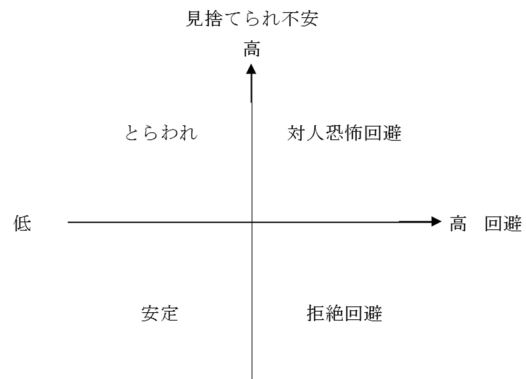
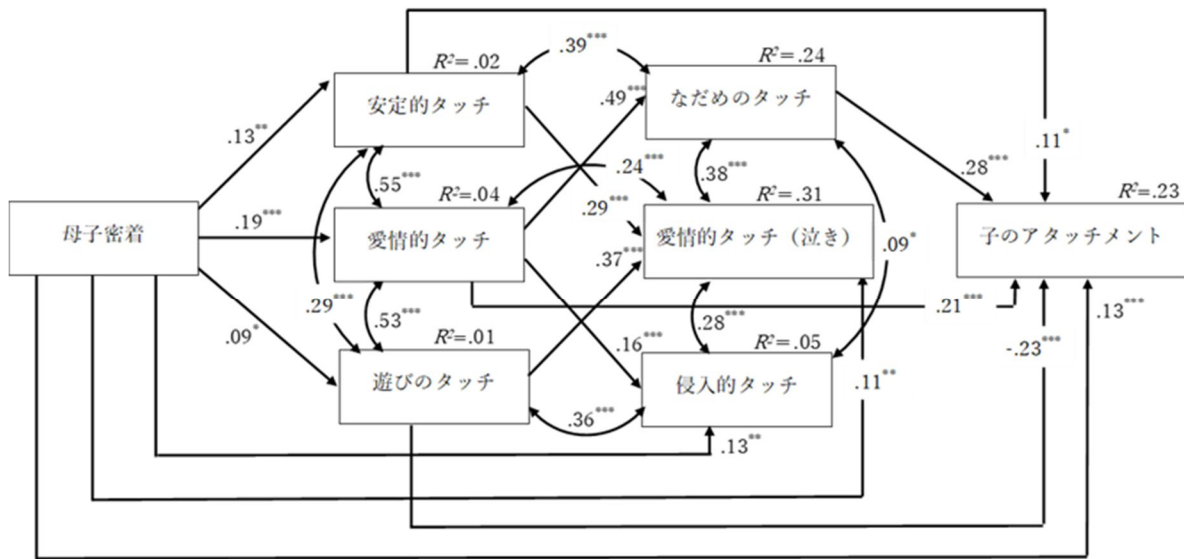


Figure1 内的作業モデルの群分け

(2) 母子の身体接触パターンが子どものアタッチメント形成に及ぼす影響
1歳～1歳3か月の幼児の分析



GFI=.996 AGFI=.974 CFI=.998 RMSEA=.031

Figure2 乳児と母親の心理的密着レベル及び身体接触が子どものアタッチメントに及ぼす影響 (誤差項は省略)

2023年3月下旬に、調査会社を通してインターネット経由で調査を実施し、1歳0か月～1歳3か月までの子をもつ母親502名 (平均年齢33.1歳, $SD=4.45$) から回答を得た。

調査内容は以下の通りであった。1) 母子の身体接触: タッチ評定尺度 (麻生・岩立, 2016) (19項目, 3件法) を用い、子が1歳になるまでの1年間、日常生活において身体接触をどの程度の頻度で行っていたかを尋ねた。2) 母子密着のレベル: 山崎・杉村・竹尾 (2002) の親子関係の親密さ尺度より「関係性の認知」における「親密」を用いた (11項目4件法)。3) 子のアタッチメント: 青木ら (2014) によって作成された Attachment Behavior Checklist (ABCL)

より「安全基地」を用いた（6項目，5件法）それぞれ平均値を尺度得点とした。

母子密着のレベルから母子の身体接触を介して子のアタッチメントへパスを引いたパス解析を行った。得られた結果から，最終的に Figure2 のモデルを採用した。

分析の結果，母子密着のレベルは「密着抱きをする」，「抱き上げる」などの「安定的タッチ」と「キスをする」，「なでる」，「さする」といった「愛情的タッチ」を介して，子のアタッチメントの形成に正の影響を与えることが明らかにされた。さらに「愛情的タッチ」は，泣き場面において「抱き上げる」，「密着抱きをする」といった「なだめのタッチ」を介して，子のアタッチメント形成を促進することも示唆された。一方で，泣き場面において「さわる」，「なでる」といった「愛情的タッチ（泣き）」及び「マッサージをする」，「つつく」といった「侵入的タッチ」は，子のアタッチメント形成に影響せず，加えて遊び場面において「くすぐる」，「マッサージをする」，といった「遊びのタッチ」は負の影響を与えることが示された。これまで育児期の母親と子の密着の程度が高いことは，育児支援の観点からは必ずしも肯定的な意味合いでは認知されてこなかったが（岩堂・松島，2001 など），本研究の結果より，アタッチメントの形成における特定の時期においては，子への安定的・愛情的な身体接触を介して肯定的に働く可能性が実証された。加えて，乳児にマッサージをしたりくすぐるといった身体接触を行う「遊びのタッチ」は，子どものアタッチメントの形成に負の影響を与えることが示された。このことは，前言語期の乳児とのコミュニケーションを考える上での，新たな視点となるのではないかと考えられる。

（3）まとめ

一連の研究から，以下のことが明らかになった。まず母親の内的作業モデルにおける「見捨てられ不安」が高いほど，通常場面・泣き場面の両場面における乳児への「愛情的タッチ」及び，遊び（通常）場面における「遊びのタッチ」の生起頻度が高くなること，及び，内的作業モデルパターンが「とらわれ群（見捨てられ不安：高・回避：低）」の母親は，「安定群（見捨てられ不安，回避共に低）」と比べて，乳児の泣き場面における「愛情的タッチ」の生起頻度が高くなることが明らかとなった。

加えて，母親が子どもとの関係性を密着的だと認知していることが，遊び（通常時）場面における「安定的タッチ」及び「愛情的タッチ」の生起頻度を高め，それらの身体接触を介して子のアタッチメントの形成を促進することが示された。加えて泣き場面における「愛情的タッチ」及び「侵入的タッチ」は，子のアタッチメント形成に寄与せず，遊び（通常）場面における「遊びのタッチ」については負の影響を与えることが示唆された。

以上より，まず母親の見捨てられ不安が高いほど生起頻度が増す「愛情的タッチ」について，アタッチメント形成期である乳児期という固有の時期においては，遊び（通常）場面という限定的な環境で，子どものアタッチメント形成に肯定的な影響を及ぼすが，泣き場面においてはアタッチメント形成に寄与しないことが明らかとなった。同様に母親の見捨てられ不安と関連する「遊びのタッチ」は，アタッチメント形成に否定的な影響を及ぼす可能性が示唆された。世間一般に言われる「ベビーマッサージ」や「タッチケア」とは，この「遊びのタッチ」と関連するものと考えられるが，アタッチメント形成への影響は「遊びのタッチ」を行うことそのものの影響なのか，「ベビーマッサージ」や「タッチケア」など，子どものために良いと考えられるものがある意味で強迫的に求め，がんばりすぎてしまう母親の養育態度や心性，あるいはその養育態度形成の裏にあると想定される不安の高さなのか，といった要因について，今後検証を行う必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西中華子
2. 発表標題 母親の内的作業モデルが母子の身体接触へ与える影響
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西中華子
2. 発表標題 乳児と母親の心理的密着レベル及び身体接触が子どものアタッチメント形成に及ぼす影響
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------